

ブーメランなヒーロー

午後 零時

街中に広がる人の波をすり抜ける。

アカデミーの仲間たちと一緒にいる時とはまた違った騒がしさが、心地いい。

「あの子に紹介出来るような美味しいスイーツのお店、見つけてみようかしらねー」
独り言を音の海に浮かべながら、摩利は街を歩く。

そんな彼の耳に、この場に似つかわしくない音が飛び込んできた。

「泣き声……?」

摩利が音の方を振り向くと、おもちゃ屋の前で泣きじゃくる、男の子が目に入った。
その周囲に、面倒を見るべき親がいる様子はない。

「あら、親御さんとはぐれちゃったのかしら……」

子どもを心配し足に向けた摩利だったが、彼よりも先に駆け寄る者がいた。

「あれは……大雅くん?」

大雅は子どもの前でしゃがみ込み、頭を撫で始めた。明るく笑いながら、元気づけているらしい。

「まあ、あつという間に泣き止んじゃったわ……。流石、忍者ショーに出てる人は子どもの対応も手慣れたものね」

摩利も合流しようかと考えたが、下手に知らない大人が増えると子どもを怖がらせてしまうかもしれない。

「せっかくだし見物させてもらいましょうか」

フフ、と小さく笑い、摩利は大雅の様子を見届けることにした。

大雅は子どもが落ち着くと、肩車をしてやりその場をくるくる回る。すると子どもは彼の肩の上で、嬉しそうに手を叩いた。

見上げるばかりで圧迫感を覚えていた子どもにとって、長身である大雅の肩車は開放感を覚えるには充分だったのだろう。

しばらくすると母親と思しき女性が駆け寄ってきて、子どもと抱き合った。

何度も頭を下げる母親に対し、大雅は気にするなと言う様にニカッ、と笑いかける。

「……どうやら無事に済んだようね」

何度も頭を下げる親子を見送ったタイミングで、彼に声を掛けた。

「げっ」

それが摩利だと分かった瞬間、彼は短く声を上げた。

「ちょっと、会っていきなり『げっ』はないでしょう。同じアカデミーに通う仲間なんだから」

「……摩利さん、もしかして今の見ていたのか？」

「ええ、見事な手際だったわね」

「あんなんフツだ、フツ」

摩利の答えに大雅はぶっきらぼうに返すが、どうやら照れ隠しらしい。むず痒そうに頬を掻いている。

「それにしてもかっこよかったじゃない。迷子の子を見かけた瞬間ためらわずに近寄って、あやしてあげて。さながらヒーローみたいね」

「あん？ 何だそりゃ、おおげさな」

言葉では軽く流す大雅だったが、彼の表情が僅かに赤くなったのを摩利は見逃さなかった。

そして自然と、自分の頬が緩んでしまうのを摩利は感じていた。

「あら、忍者シヨで普段から演じてるじゃない。ヒーロー」

「それとこれとは話が別だろうが。あ、その顔、さては面白がってんな？」

大雅はむっ、とした声で指摘するも、赤くなっているのを隠せていない。それが摩利には可愛らしく見えた。

しかしそのほほえみは、大雅の言葉であっさり剥がれ落ちる。

「……摩利さんだって、随分とかっこいいことしてたみたいじゃねえか」

「え？」

「ガラ悪い連中に絡まれてた女を、偶然その場に居合わせたからってだけで、かっこよく守ってやったらしいな。そっちだって立派にヒーローやってるだろ」

「その話、誰から聞いたの？」

きょとん、と首を傾げた大雅が、何故疑問に感じるのか分からないと言わんばかりに告げてくる。

「誰って、響が『princeみたいだネッ』って話してたが……」

「そう……彼らしいけど、少し『勉強』が必要みたい。イメージは大切だって教えてあげない？」

「え？ 何だよ勉強って。な、ちょっと！ 目が笑ってねえぞ!？」

一瞬で様子が変わったことに大雅は顔を引き攣らせて後ずさるが、摩利は気にも留めない。

すぐさまポケットからスマホを取り出し、摩利はチャットを送った。

『響くん、ちょっと会って話がしたいのだけど、いいかしら』

すぐさま既読がつき、返信が飛んでくる。

『エ、今からジェイコブと忍者 movie について語り合おうところなんだけど』

『right now ？ お願いな？』

『Oh……。何だか嫌な予感がする……』

予定を取り付けた摩利はスマホをしまい、大雅に向かって手を合わせる。

「大雅くん、ごめんなさい、わたしこれで失礼するわね。あと、響くんが言ったエピソードは誰にも言わないでね？ ヒーローとかちよっとキャラが違い過ぎるもの。」

「あ、ああ。分かった……」

返事をしっかり聞いてから、摩利は響の所へと急いだ。

「なんだってんだ……。そんなマズイことだったか……？」

残された大雅は、摩利の豹変ぶりに呆気に取られつつも、走り去る背中を見送るしかない。これから響がどんな目に遭うのか、それについては考えない方がいい気がした。